

の文化というのはローマ的なものが最高なわけ。ギリシャもあるけど、ギリシャの文化はそのままローマにつながっているし、ヨーロッパのメンタリテイのベースはローマ的なものなのよ。すべての道はローマに通ず、っていうのは、カルチャーも全部っていうこと。だから、フランス人は、イタリアのことはものすごく評価するの。トスカーナあたりの文化とか。インテリアとかもね、いいよね、これ、と言うと、トスカーナ風だったりする。イタリア人の美術センスをものすごく評価するのよね。

田島——イタリアっていう国は、天才と変人しかない、ふつうの人がいないってよく言われますよね。ミケランジェロとかレオナルド・ダ・ヴィンチとか。そういうわずかな天才が作ったもののおかげで、イタリアという国はいまだに食べてるという……。

吉村——それにイタリアにはバチカンがあるし。バチカンの権威といったら、ヨーロッパでは「圧勝」だから。あの人たちにとっては心のよりどころだから。そういう意味でまた、イタリアってすばらしい国だと思ってるわけ。なんだけど、ひとつの国家として考えると、ズルツ、としちゃうのよね。

## 会話を楽しむ、人生を楽しむ

田島——吉村さんも本に書かれてましたが、フランス人と同じようにイタリア人にとっても、テーブルの上のピアット(料理)もご馳走なんだけれど、やっぱりコミュニケーションが一番のご馳走で、どんな人が来て、どんな話が聞けるか、その場をどれだけ楽しめるかが一番大事なんですよ。イタリア人は、こんな面白い話が聞けたとなると、今度は彼のオフィスでその話を伝え、オフィスの

人はその話を彼らの家族に伝える。私はパーティーで会った人から、翌日、「昨日はすばらしい夜だった」と電話もらったことがあるんです。いったい何がすばらしかったのかと思ったら、「長年不思議に思っていた日本についての謎が解けた」と感動しているんですね。私はそれくらいのことでも感動されたことに感動したんですが。

吉村——そういう会話があるというのが、日本の風土には異質だから、なかなか実感がわかないのよね。ホームパーティーにしても、お料理自慢になってしまっただけで、話にならないでしょう。「まあ、おいしいですね」で終わっちゃうじゃない。どうしても人を呼ぶってことになるよ、そうなのよ。会話のやりとりで、面白いねー！ とお互いに新鮮な驚きを得られる……そんなコミュニケーションの醍醐味を感じられるなんてことなかなかないですよ。我が家に人を呼ぶ場合は、私などとはそういう会話での驚きを貪欲に求めようとするほうだから、居合わせた誰かが少々傷ついたとしても、その場の雰囲気盛り上がりつつ笑えればいいやなんて、あざといほどの思いをこめて会話をしようとするけれど。でも、それって日本人はあまりないのよね。イギリス人にもないわね。それに比べてやっぱり、フランス人、イタリア人は、どうせ死んじゃうんだ、人生は楽しもう！ 自分の気持ちが高いになるように楽しく喋ろうじゃないかと、モチベーションを高めようとするというか。田島——日本人は、自分の意見を言う前に、相手はどうなのかと考えてしまいますから。それは相手を思いやるという美德でもあるわけですけど。じつさい、イタリアだとわれもわれもと言いきりじゃないかと思えることもあります。本当は自分の意見を言いながら、相手を思いやってあげることでできるというのが、理想ですよ。相手を思いやるばかりで自分のこと言えなければ、相手も信用してくれないですから。